

HOPE

|2| 2025年総会

M.カタリナ(ナザレト)

編集部より:希望の巡礼者



ティモシー・ラドクリフは、シボスの話の流れから、私たちの希望はどこにあるのかと問いかけ、次いで、私たちの希望、それは聖体祭儀だと答えます。『闇の極まるその一刹那、イエスは世界の歴史において、最も希望溢れるジェスチャーをなさるので…「これを、わたしの記念として行いなさい」と、おっしゃって。』終わりのはずが、終わりではなく、むしろ根底からの、新しい始まりでした。私たちのために、ご自分を完全にささげてくださるイエス、この方こそ、私たちの希望の拠り所なのです。

今号のニュースレターでは、私たちの「聖体祭儀の希望」に焦点を当てます。

この隠世修道院生活において、聖体祭儀とは何を意味するのか、そのこだまの響きに耳を澄ませます。

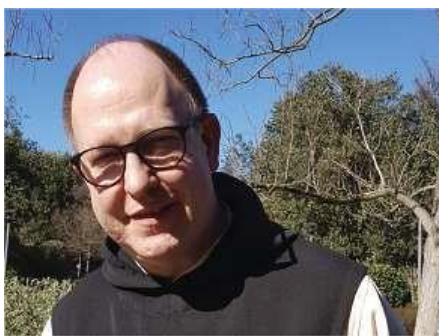
地方の再配分の可能性というテーマも浮び上がっています。経験豊かな長上、通訳者、秘書局の方々がお寄せ下さった総会についての考察もご覧いただけます。もちろん、折り、イラストや小嘶も。…希望、これについてたっぷりとお楽しみいただけるのでは、と、「希望して」おります。

追記

それと、ダンスもお忘れなく！
チャツ、チャカ、チャ！

D.ベルナルドウス

コラム:希望、という、いのちの名前



降誕徹夜祭のさなか、サンピエトロ大聖堂の聖年の扉の開放に立ち会う、という恩典に与りました。教皇フランシスコが車椅子にお座りになったまま、その扉を開かれた瞬間は、心打たれるものでした。弱さのただ中であってさえ、私たちは扉を開くことができるのです！

教皇様に続いて、神の民の諸々の代表者方が、この聖年のために特別に作られた賛歌を歌いながら、聖年の扉からサンピエトロ大聖堂に入堂なさいました—この量句を口ずさみながら:

『私の希望は、炎となって燃え立ちます。私の歌がみもとに届きますように。終わりなき生命の源よ、人生の旅路にあって、私はあなたに寄り頼みます。』神の民の人波の中で、私は本会がこぞって希望の巡礼者となり、未来へと歩みを進めながら、この聖年を

迎えるのを見ました。

総会に臨む兄弟姉妹の誰もが、希望という生ける炎を、その手と心に抱いているのです。この炎は、消え入りそうなきもあれば、ごうごうと燃え盛るときもあります。ただいつでも、私たちを生かす希望であることに変わりはありません。

この人波に、聖ベルナルドの伝記に登場するひとつの幻視が私の脳裏に浮かんできました。ある時、夜間の祈りを終えて外を歩いていた聖人は、神に祈り、その祈りの最中に、『霊的豊かさへの熱い望みにとらわれました。突如、彼は立ち尽くし、祈りのただ中で半ば目を閉じたまま、ありとあらゆる民族衣装をまとった人々の群れが、周囲の四方八方の山々から、この谷のふもとまで降りてくるのを見ました。谷は彼らを収めきれないほどでした。』

サンチェリのウィリアムはこう付け加えています。『この話の意味するところは、周知のごとくです。この幻に、神の人は大いなる慰めを受け、兄弟たちを励まし、その心に語りかけながら、神のいつくしみに決して失望してはならない、と説いたのです。』(Vita Prima 26)

兄弟姉妹の皆さん、総会開催の年でもあるこの聖年、霊的な実りを希求する皆さんの願望がいや増しますように。

ゆめゆめ、希望を捨ててしまうことのないようにいたしましょう。『私の希望は、炎となって燃え立ちます。私の歌がみもとに届きますように。終わりなき生命の源よ、人生の旅路にあって、私はあなたに寄り頼みます。』

PS - この聖年のテーマソングを、総会のテーマソングに借用するのも、なかなか良さげに思えるのですが…！

M.イザベル(ヴァル・ド・イニー)



2023年12月31日の時点で、本会には153の修道院があり、それが11の地方と1つの準地方(カナダ地方)に分かれ、【それぞれ】9から19の修道院で一つの地方のグループを形成しています。各地方は互いに相当距離的な隔たりがあります。

世界中の多様な地理的地域、言語圏、文化圏、民族、国家にわたって諸修道院が存在していることは、本会にとって、豊かさであると同時に、コミュニケーション上の様々な課題をも生み出しています。これまでも、既に長年にわたって、地方再編の検討が重ねられてきましたが、2024年チリの中央委員会で、

地方の再配分

2025年の総会の議題として、本件が取り上げられました。具体的には、地方の構成とその機能を見直す、という問題です。この2つのことは密接に関連し合っているからです。

現状におけるメリット・デメリット

地方の規模や地理的な観点から見ると、小さな地方では修道院数が少なく、互いに近接しているため、交流が容易であり、その頻度も高く、兄弟的なものとなります。意見交換は、全員が同じ言語を話す場合、内容も濃く、また易しくなります。相互扶助や司牧的配慮も促進されます。しかし修道院数が少ないために、地方の円滑な運営や異文化への開放を妨げることもあります。

一方、大きな地方では、共同体は互いに地理的に隔たっており、文化も多様です。翻訳や通訳が必要となり、そのために意見交換はより煩雑で、さくさくとは進まなくなり、相互理解を妨げることもなります。さらに、男女の修道者数に応じて2人目の代表者を置くことができるにもかかわらず、小さな地方に比して、中央委員会への代表者は少ないのです。

新たな地方配分についてのアイデア

こうした【諸地方間の】不均衡を是正するために、いくつかの提案が打ち出されています。

A ヨーロッパでは一回り大きな地方を創設したうえで、現在の地方は司牧的な会合のための準地方として保持します。また、逆に、アフリカ・マダガスカル地方、オリエンス地方、中央・ラテンアメリカ地方などの大きな地方については、地理的・文化的により近い修道院で構成される準地方を設けます。

B 地方を創設するうえで、同じ言語を話す共同体をまとめることで、異文化間の交流を確保しつつ、通訳や翻訳の必要性を大幅に減らすことを目的とすること。

C 地方の運営方法を検討し、地方のデレゲがより深く関与するために、新しい基準を導入すること。つまり、全ての地方にデレゲを置き、その参加と役割は全ての地方会議において、同等であること。これにより、デレゲは地方間・文化間の絆を深め、本会全体で、さまざまな視点の表明と受容を促進することができます。※

アバカリキのM.レジナと、タラワラのD.スチールは、2025年の総会で審議されるこのテーマについて、作業文書の作成を依頼されました。これは、特別審議方法、すなわち、すべての委員会によって扱われます。

【※訳注：総会時の、長上でない地方のデレゲなのか、中央委員会における地方の代表者(地方の議長)なのか、判別がつかせませんでした。】

D.ヘスス(パライソ)

地方:傾聴と尊敬



私の修道院は中央・ラテンアメリカ地方に属しています。1998年以来、私はその会合にもれなく出席してきましたが、この長い経験を省みると、いつも心に響いていたのは、「傾聴」と「尊敬」という2つの言葉でした。

中央・ラテンアメリカ地方は広大な地方です。スペイン語圏の国々(2カ国を除く)に、15の修道院(男子修道院7、女子修道院8)を擁し、概ね共通の文化的・宗教的背景で結ばれています。カトリックの教えは16世紀以来、これらの国々を形成し、そこに新しく混合的なアイデンティティをもたらしてきました。

このため、私たちは互いの文化にそれほど差し障りを与えることなく、コミュニケーションを取ることが出来ます。しかしそれ以上に重要なのは、各々の共同体がどんなところなのか、またどんな生活を送っているのかに耳を傾け、敬意を払う雰囲気があることです。これは、シトー会のカリスマを真摯に、健全に実践することから得られる福音的な結実でしょう。地方が、考察や相互扶助、支援の場として真の意味を成すのは、このことによる、と理解できます。

M.オルタンス(クラルテ・デュ)

証し:聖体祭儀



キリスト教の共同体が集うのは、まさに聖体祭儀の周りに、です。洗礼と修道誓願を全うするために必要な恵みは、ここでいただきます。【オスチアの】聖別の後、キリストは聖体の中に真に現存しておられます。キリストを受け入れ、いただくことで、私たちはキリストの体と一体となるのです。ですので、回廊やその他の場所で姉妹たちに出会うとき、私はキリストと出会っているのです。困難な状況にあるとき、私は聖体から力を得ます。聖体は、隠世修道者としての聖別奉獻に堅忍する力を、私に与えてくれます。

Br.アルノー(ムンカバイ)



聖体祭儀は、私が私であることを、私が生きていることを、捨てるようにと求める神秘です。

聖体祭儀は、ご自身を与えてくださるお方を受け入れることを教えてくれる神秘です。

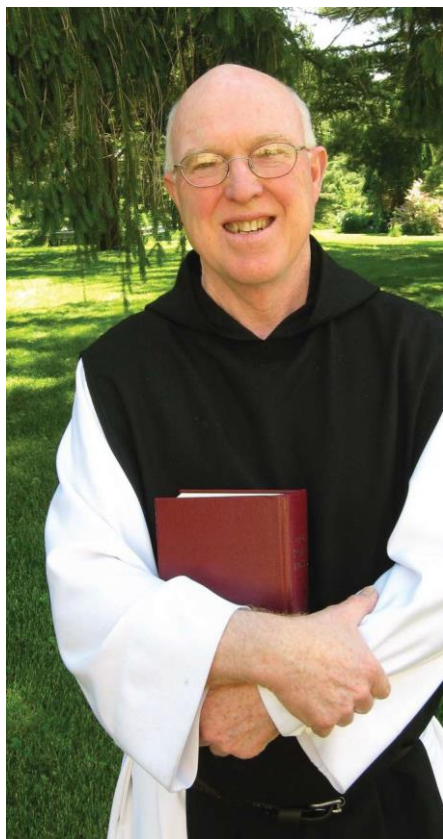
聖体祭儀は、私を招かれる神秘です。近くにいる兄弟たち、遠くにいる兄弟たちに加わり、一つとなるように、と。

シノダリティ(共に歩む姿勢)についてのシノドスとは、冬眠から抜け出し、希望の巡礼者となることによって、神の民が目覚めるプロセスである、と表現することができます…それを必要とし、切望している世界に向かって。

ミリアム・ウィレンス教授博士

2021年以來の、シノダル・プロセス運営委員会の委員

D.ブレンダン(ニュー・メルレー) 総会：インクルージョンの進展の物語



マサチューセッツ州ホーリーヨークの1984年の総会を皮切りに、私は14回の総会に出席しました。この総会では、マイケル・ケーシー神父様が、会憲を一つひとつ読み上げて、総会議員による討論が行われました。これにより、第二バチカン公会議によって課された新会憲の作業は全うされました。それ以来、本会は会憲の拡充と改善を続行しております。

1984年の総会の終盤に、その次の総会(1987年)には、修道女にも、ご参いただくことを決議しました。ご年配の男子大修道院長の中には、目も当てられない結果を予想なさる方もいらっしゃいましたが、まったく逆の結果となりました。現在、本会は男女からなる一つの修道会であり、これは教会では、まだ大変珍しいことです。

1984年以来、数々の決議がなされましたが、大抵、より多くの参加を求めるものでした。ラス・ウエルガス、男女混合の調整委員会、女子大修道院長による男子共同体の視察の同伴、そして今や、男子/女子の母院長、です。

総会は、仕事一辺倒で何の遊びもないわけではありません。D.アンブローズのお祝い日に、各地方が様々な見世物や寸劇を披露したことがありました。アメリカ地方は、日本の諸修道院のデレゲがアコーディオンで伴奏する”Little Brown Jug”に合わせて、スクエアダンスを見事、やってのけましたし、スペイン地方代表のスペイン人男子大修道院長は、目の前の椅子にお座りになったスペイン人女子大修道院長に、オペラのラブソングをささげました。これぞ、インクルージョン！

M.ロザリア(ヴァイトルキアーノ)

1880年から現在までの総会



総会の体験は、私にとって、まず何よりも、世界中の兄弟姉妹たちとの出会いの驚きでした。シトー会のカリスマが根を下ろした様々な民族・文化の美が賜物として表現され、また「シトー会的キリスト」【※括弧訳者】の生きた一員となるよう招かれているようにも感じました。

長年にわたって扱われ、いつも繰り返し現れる大きなテーマは、私たちのアイデンティティとカリスマ、養成、また、近年ますます取沙汰されるようになった、不安定さ、です。最後のものは、それが引き起こす深刻な諸問題について、対応の難しさが伴います。不安定さの根本的な原因を、どのように見極めるのか？ 脆弱さの状況下でどのようにそれを受け入れ、養成するのか？ などです。

聖霊と兄弟的な愛徳によって、私たちは希望の道へと導かれました。そして、預言的な声が絶えることは、決してありませんでした。この声は、まず私たちの心と目を、つまり、カリスマに対する私たちの認識を刷新するよう、呼びかけるものでした。

インカルチュレーションや多文化間交流の経験の中で、わたしたちは信仰の力を経験しました。この信仰は自らに私たちを同化させ、あらゆる文化を浄化する力があります。また、わたしたちは世界が画一化されることの落とし穴を知り、キリストから新たに始めることの大切さに、繰り返し気づかされました。このキリストこそ、兄弟的交わりの源泉であり、その中心なのです。神に感謝を捧げましょう！

Sr.クロチルダ(グレンケン)

通訳するなら、自分を忘れなさい。



50年に及ぶ自分の隠世修道院生活の中で、私は英語・日本語通訳者として総会(5回)、コンシリウム・ジェネラーレ(中央委員会)(3回)に出席する、という特別な機会に恵まれました。この間、厳律シトー会は大きく変化し、今も変化し続けています。多くの修道院がヨーロッパやアメリカの外に創立されました。「地方」が誕生し、今では厳律シトー会の機構の中で不可欠の要素として、しっかりと定着しています。厳律シトー会は、今や多文化・多言語の組織です。そのために、通訳者や翻訳者のニーズは高まっています。現代のテクノロジーは役に立ちますが、それだけでは決して十分ではありません。

真のコミュニケーションには、いつでも、人の「肌感覚」が必要なのです。

同時通訳のワークショップに参加していたとき、講師がこうおっしゃいました。「通訳をするときは、自分を忘れなさい。相手が何を言っているかを『聞き』、聞いたことをそのまま別の言語に置き換えるのです。」

隠世修道院生活でも、同じようなお勧めを耳にしないでしょうか？

2025年の次期総会で奉仕される通訳者・翻訳者の方々が、「労苦に満ち、隠れた」そのお仕事のために報いをいただき、祝福されますように！

Sr.フィアクラ(グレンケン)

総会の英語の書記



2018年の地方会議の書記のお務めを受けがった時、それがシトー、ローマ、チリでの中央委員会への参加につながることは、思いもありませんでした。もちろん、2022年のアッジにおける臨時総会の第1部と第2部への参加も、です。入会当初、世界を旅して回るのは、もうおしまいだと思っていたのですが、サプライズがお好きな神様には、このことのゆえに、余計に感謝しなくてはなりません！

総会の書記のお務めは、大変なお仕事ですが、ワクワクするような、とても充実した経験です。この経験を通して、本会の国際性とその働きについて、より幅広く理解することができました。また、世界中から集まった、才能豊かで献身的な方々と多く出会い、新総長の選挙にも立ち会いましたし、本会の祈りと観想の生活における会憲と規定-誰もが従うべきものです-の持つ実際的な重要性や意味をも、理解することができました。

シナイ山に登るには、並々ならぬ努力が必要です。登り始めるとすぐに、まるで切り立つ壁をよじ登るような感覚を覚えます。しかし、私にはそれほどの努力とは感じられませんでした。なぜなら、自分の願いが神の御心に沿ってかなえられていると実感したからです。

エゲリア、383年12月17日(主日)の巡礼日記より。

魂の渴望は強く、贖いを得てキリストとともに生きることを切望しています。

彼女の渴望は強く、凄まじく、自分の存在すらも重苦しく、酷いのです。渴望が彼女にもたらす苦痛は言語に絶します。それでも、彼女は希望を抱いて生きねばなりません。希望は彼女の胸を締め付け、苦しめます。ああ、ミネ(愛)の聖なる願いよ、愛する魂の中で、汝の力はどれほど強いことでしょう。

ナザレトのベアトリス、『ミネの第7の道』より

祈り



2025年、という聖年のこの年、厳律シトー会は「現代世界におけるシトー会のカリスマ:希望のしるしのもとに」というテーマで、長上たちの総会を準備しています。

総会の準備が円滑に進みますよう、あなたに祈りを捧げます。また、総長様、そして総会に参加する全ての長上をあなたにお委ねいたします。聖霊がこの方々を照らし、次の総会でその仕事の実を結び、あなたの喜びとなりますように。そして現代世界において、シトー会のカリスマが、しっかりと根付きますように。わたしたちの主、あなたの御子イエス・キリストを通して、私たちはこれを願い求めます。

小噺

ある牧師の娘が、オールナイトでほっつき歩き、午前4時に帰宅しました。しかめっ面で娘を見やると、父はこう言い放ちました。
- 「おはよう、悪魔の娘。」 少女はうやうやしく答えました。
- 「おはようございます、お父様。」



D.ヤン(コールデイ)

